

日曜日だけぼくのパパ

C・ガースン 作
落合 恵子 訳



N.D.C. 933 日曜日だけぼくのパパ

C・ガースン 作

落合恵子 訳

旺文社 1983

200P. 22cm (旺文社創作児童文学)

小学上級以上

Corinne Gerson : Son for a Day 1980

落合恵子 (おちあい けいこ)

1945年、宇都宮市に生まれる。明治大学英米文学科を卒業。文化放送に勤務後、作家として活躍中。

著書に、『カレーライスのすきなペンギン』、『ママ、あのことないしょにしてて』、『ピエロの学校』などの児童書のほか、大人向けのものとして『結婚以上』など多数。

子どもの本の専門店『クレヨンハウス』主宰。

C・ガースン

10代前半から執筆活動を開始し、大学卒業後、女性雑誌や書籍の編集者として活躍していたが、家庭の事情で転職。後に、児童作家となる。

ペンシルバニア、マンハッタン、ブロンクスなど、転々と移り住み、現在ニューヨークのニュー・ロッシエルに住む。

ブロンクス動物園の大ファン。

日曜日だけぼくのパパ

C・ガースン 作 落合恵子 訳

SON FOR A DAY by Corinne Gerson
Copyright ©1980 by Corinne Gerson
Illustration Copyright ©1980 by Velma
Hsley

Japanese translation rights arranged with
Frances Goldin Literary Agent through
Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

もくじ

第一章	動物園 パパ	9
第二章	すてきなゲーム	36
第三章	ぼく、行方不明になる！ ゆくえふめい	63
第四章	お楽しみのテツペン	91
第五章	動物園 ママ	109
第六章	ばれたうそ	138
第七章	ゲームの終わり	158
第八章	パパがいつばい	174

(さし絵 V・イルスリー)

カ
バ
ー
装
丁
絵

小
坂
し
げ
る

ヘッソージ

もし、きみのパパとママが離婚して、パパとママのどちらかが、きみと別れて住むようになったとしても、それは、きみのせいではないんだ。

わかっていても、そうなった時、きみは、寂しかったり、悲しかったり、大人って勝手だと腹を立てるかもしれない。

たしかに勝手な大人もいる。でも、悩^{なや}んで

一生懸命^{いっしょうけんめい}考えた末に、それがいちばんいい方

法なのだと離婚^{りこん}を選ぶ大人がいることも知っ

ておいたほうがいいよ。

もちろん、きみがいくつであろ^うと、子^こと

もであるきみに、両親はきちん^と説明すべき

だし、きみの意見も聞^きくべきだと思^{おも}うけどね。

離婚^{りこん}をすると、きみのパパとママは夫婦^{ふうふ}で

はなくなるけれど、きみにと^って、パパは依^い

然^{ぜん}としてパパだし、ママもママであることを

やめてしまうわけではない。

つまり、両親が離婚したからといって、きみは決して“愛を失った子”ではないというわけだ。

きみが、きみであることに変わりはないのだよ。

第一章 動物園 パパ

たとえば、きみにパパかママかのどちらかがいないとしても、自分を「かわいそうな子ども」だなんて思っちゃいけないよ。

家族というのは、ふつう、一生にたった一つしかないと考えている人がいるけれど、そんなのつまんない。

それより、一年に二十組もの「家族」ができたほうが、すてきじゃないかな。いろいろな意味でね。そう、去年のぼくのように。

ぼくが、そんなヘンテコにおもしろいことを思いついたのは、去年のこと、十一歳きいの時だった。詳しいことを話し始める前に、自己紹介じこしょうかいをしよう。

ぼくの名前は、ダニー。ドロシーおばさんと二人で、ブロンクスに住んでいる。パパはいない。

ママは女優じょゆうの卵たまごなんだけど、

「もうちょっと待っててね、ダニー。そのうちきつと、今よりましな生活ができるわ。」

とかなんとか言って、テレビの仕事のために、今はカリフォルニアに住んでいる。

ママは、ママなりに一生懸命いっしょうけんめいなんだ。

だからぼくは、ドロシーおばさんと暮くらしているってわけさ。

ぼくは、いわゆる都会とっ子で、育った所は、東八十一番街ばんがいだった。

七歳さいのころには、バスの路線なんか全部覚えてしまったし、マンハッタンやブルックリンな

ど、〃ぼくんちの庭〃って感じた。

ブロンクスは、ドロシーおばさんといっしょに引ひ越して来るまで知らなかったけれど、道とか街角まちかどとかを覚えるのは、ぼく、得意なんだ。

だから、引越して二週間もたったら、ブロンクスもぼくの庭になった。動物園までの道順——バスに乗ればすぐだし、歩いて、そんなにかからない——もすぐに覚えてしまった。

月曜から土曜日までは、毎日——まあ、だいたいね——学校に行く。

たまに、今日はどうしても学校に行く気がしないっていう日には、街をぶらついたり、店のぞいたりしていた。

とにかく、そこらじゅう歩き回ったんだ。でも、ぼくの“生きがい”は、やっぱり週末だ。

なぜって、ぼくが“家族”を見つけるのは、週末の動物園だったから。

もちろん初めから、“家族”を見つけようとして、動物園に通っていたわけじゃない。別に目的がなかったって、動物園は楽しい所だしね。

ぼくは、もうすっかり夢中になっちゃって、友達と動物園通いをしていた。

同じクラスのやつもいたし、お菓子屋なんかたむろしていて、いつの間にか友達になった子もいる。

ぼくは、どの子とも、まあ仲良くしていたけれど、特に親友というのはいなかった。

ぼくたちは、学校帰りに街をうろついたり、野球をしたりしていた。

だけど、やつらがぼくを動物園に連れて行ってくれてからというもの、ぼくは突然、土、日が忙しくなっちゃって、あんまりやつらと付き合えなくなってしまったんだ。

というのも、動物園には、父親一人に連れられて来る子どもが、とても多いんだよ。

動物園通いをするようになって二度目の週末、ぼくはそのことに気がついた。

ぼくにとって、それは大発見だった。

母親らしい女の人といっしょの子も大勢いたけれど、ぼくが興味を持ったのは、父親らしい男の人と小さい男の子、という組み合わせだった。この組み合わせが、意外に多いんだ。

それで、その時いっしょにいた友達の一人に、

「あれは、なんだい？」

と、聞いたんだ。と、やつは、

「動物園パパさ。」

「なんだ、その動物園パパって？」

するとやつらは、そんなことも知らないかとゲタゲタ笑って、あのテの父親は、一週間に一回しか自分の子どもと会えないんだと説明してくれた。

つまり、両親が離婚して、母親と暮らしているために、週に一度父親と“面会”をするってわけだ。

その面会日とやらが週末で、父親としても、子どもをどこに連れて行ってやればいいのかいろいろ迷ったりして、そこで思いつくのが動物園というわけだ。

「なるほどな。だから動物園パパってわけか。それで、あんなに変な感じなのか。」

ぼくは、納得した。

「変な感じって、どういうことさ？」

「よくわかんないけど、あの動物園パパたちを見てみるよ。みんな、おしりのあたりに小さな虫がモゾモゾしているみたいに、なんとなく居心地悪そうじゃないか。」

「そりゃそうさ。自分の子どもといったって、週に一回しか会えないんだし、その週一の面会日は、言ってみりゃ、子どもに対するサービス・デーだろう？ どう子どもにサービスしたらいいか、動物園パパたちもとまどってるのさ。……それに……。」

友達は、そう言って言葉を切った。

「それに？」

「今日はパパと出かけるんだって、子どもが大騒ぎおおさわぎすると、ママのほうは、ちよいとおもしろくなくなるじゃないか。もと夫婦の間の微妙びみょうな対立たいりつっていうのかな。離婚りこんした夫婦が、子ども

を取り合うって、よくあるじゃないか。」

友達は、大人っぽい口調で言った。

なるほど。子どもも大変だけど、大人も大変だ。そう言われてみると、子どもを二、三人連れてある「動物園パパ」より、一人しか連れていない「動物園パパ」のほうが、浮かない顔をしている。

友達の説明を聞いているうち、ぼくには、その理由が、見えてきた。

子どもが何人かいれば、子ども同士でワイワイできるけれど、父親と息子^{むすこ}が一对一だと、「動物園パパ」としても、まじに子どもと向かい合わなきゃならなくなるから、シンドイことだろう。ドロシーお婆さんの口癖^{くちぐせ}じゃないけど、「質より量」ってことかな。

などと思いながら、「動物園パパ」とその息子をチラチラ観察している時、突然^{とつぜん}、ひらめいたものがあつた。

「動物園パパ」を、ちょっと手助けしてやろうじゃないかってね。

つまり、ぼくが、彼ら^{かれ}に丸^{まる}一日付き合えば、父と子の間の気まずさみたいなものが、少しは和らぐのではないだろうか。

その代わりと言ってはなんだけど、ぼくも、ぜいたくな暮らしと“家庭の味”を、その日一日楽しませてもらう、という寸法だ。^{すんぽう}

ぼくのほうは、ママはカリフォルニアだし、なんの差し障りもない。^{さぶ}

そりゃドロシーおばさんは、ママの代わりとしては、かなりイイ線いってるけれど、ぼくとしても、たまには大人の男の人と話してみたいしね。

そこでぼくは、土、日の二日間動物園通いをし、家庭の味とやらを一週間に二回味わってやろうと決心したんだ。

さて、ぼくのM・Oを、紹介しよう。^{しょうかい}

M・Oというのは、ほら、テレビの探偵物^{たんていもの}なんかによく出てくるじゃないか。

何の略なのか、マードックさんに教わるまで知らなかったのだけど、*modus operandi*の頭^{かしら}文字で、マードックさんによると、「作戦の方法」という意味のラテン語だそうだ。

マードックさんというのは、ぼくの“動物園パパ”だけど、その話は、後にしよう。

とにかく、ぼくのM・Oは、こんな具合いだ。